



第46回世界銀行・ 国際通貨基金総会

池 本 幸 生*

世界銀行・国際通貨基金 (IMF) の第46回総会が10月15日から17日までの3日間、バンコクのシリキット王妃国立会議場 (Queen Sirikit National Convention Centre) で開催された。アジアで開かれるのはインド、日本、フィリピン、韓国について5番目のことである。シンガポールとの競争に競り勝って世銀・IMF 総会の誘致に成功したのが4年前のことである。当時はセントラル・プラザのバンコク会議場 (Bangkok Convention Centre) で開催するという計画であったが、一転して新たに国際的にもトップクラスの会議場をタバコ工場の隣に建設することに決まったのが2年前のことである。それが1万人を収容できるシリキット王妃国立会議場である。2年間で完成できるか危ぶむ声もあったが、18カ月という短期間で完成した。また、今年2月のクーデターを嫌って他の国に会議を移すのではないかという観測もあったが、そういうこともなく無事、予定通りの開催となった。

市内のあちこちに会議への出席者を歓迎する看板や垂れ幕が揚げられたが、中にはタイ語で書かれたものもあって、いったい誰を歓迎するのかなどとも思ったが、一万人の会議出席者およびその関係者の何割かはタイ人なのでそれでもよかったのだろう。タイ語で書かれていた割には一般の人々にまで会議のことが知れ渡っていたわけではないようである。知れ渡っていたとすれば、それは休日が2日増えるということでもかもしれない。会議の始まる前日 (14日) と初日 (15日) は官庁や学校などが特別に休日となった。12,13日の土曜日曜と続けると4連休になる。そして、この連休にはデパートなどにはバーゲンセールなどは控えさせる一方で、人々には地方に旅行に出かけることが奨励された。これも皆バンコ

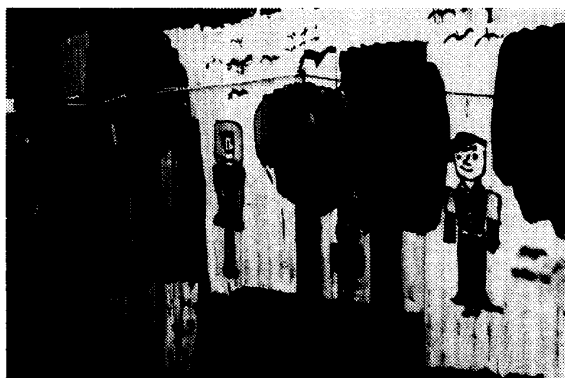
クの悪名高い交通渋滞で外国からの会議参加者を悩ませないための方策である。会議参加者の印象を悪くすることは、タイへの投資に悪影響を及ぼすとの判断もあったようである。結果はまずまずといったところだろう。それにしても、会議の終わる17日あるいは18日まで休みにすれば、会議参加者にとっても休みをもらえる者にとってももっといいだろうに、そこまではやらないというのがタイらしいという気がする。

交通渋滞の緩和策として会議場の西側を通る鉄道沿いにラーマ4世通りとスクンビット通りを結ぶ道路を新たに建設することになった。会議場東側のラチャダピーセク通りの通行が制限されるためである。この道路建設の犠牲者は鉄道沿いに住んでいたスラムの住人である。彼らの一部は立ち退きの補償としてラカバンに家を与えられたが、残りの70世帯あまりは立ち退き料6,000バーツを貰ったのみで、近くの高速度路下に新たに住むところを確保しなければならなかった。そこは電気も水道もないために、軍が発電機を提供したが、それも数日にして故障し、また給水車もある建設会社の敷地を通らなければならないために入ってこれなくなってしまった。

もうひとつ立ち退きを迫られたのは会議場入り口に面しているスラムである。こちらは交通渋滞が立ち退きの理由ではなく、見栄えが悪いというのがその理由である。それでは見栄えを良くしましょうということで描いたのが写真の絵である。住民の順応性とたくましが現れていてなかなかいい絵だと思うのだが、残念なことに会議当日はその前に大型バスが何台も並んでいて会議参加者には十分にその絵を鑑賞できなかったのではなかろうか。

過去数年のタイ経済の高成長はプレム政権時代のIMFの助言に従った自由化政策の結果であるとする見方がある。この立場からすれば、今回の会議がタイで開かれたということはIMFの指向する市場

* Yukio Ikemoto, The Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University



スラムの壁に描かれた絵

主義的な方向の正しさを証明するという象徴的な意味をもつことになる。一方、IMFの市場主義的な政策に対する批判は、それが貧困および所得分配を悪化させるというものである。しかし、TDRI(Thailand Development Research Institute)の最近の研究結果によれば高成長の始まる1986年から88年にかけて所得分配は平等化している。この点でもIMFにとって都合がいい。上述のIMF批判は、経済発展段階が進むにつれて所得分配は不平等化から平等化に転じるという「クズネッツの逆U字仮説」や景気変動の局面によっても所得分配は影響を受ける事実を無視した議論である。タイの場合、これら、特に後者の理由により平等化が現れたものと思われる。統計的には、これは中間層の所得シェアの拡大として現れている。1988年以降どのような変化が生じているのか今のところまだ分からないが、スラムの増大や農村の疲弊を強調する人たちがいる一方で、本音では近年の高成長の恩恵は農村や都市部の低所得層まで及んでいると考えている人もかなりいる。

バンコクのスラムの増大は都市貧困層の増大として統計によっても確認することができる。しかし、これは1985/86年が景気の底であったという特殊な事情を考慮する必要がある。実はこの時期に全国の貧困層の割合は1980/81年の27パーセントと比べて9ポイントも高い36パーセントに達している。(貧困度が上昇したのは信頼できる統計が存在する

1961年以降、これが初めてのことである。)ところが都市部と農村部とに分けてみると、この時期、都市部の貧困世帯の割合は7.5パーセントから5.9パーセントに低下しており、逆に、農村部の貧困層の割合は急増し、この時期の貧困度の上昇は農村部における貧困度の上昇に因っていることが分かる。つまり、不況のために都市部(特に地方の)の貧困層が農村部に帰って行ったと考えられよう。このことから1985/86年から88/89年にかけての都市貧困層の増大は、農村に帰っていた人たちが都市部に戻って来たと見るができる。同時にバンコク経済の拡大というpull要因の方が強いために、都市貧困層の状態はpushされて出てきた場合ほど事情は深刻ではないという見方が出てくる。もちろん、個別のケースではかなりひどいものもある。例えば、10月31日に発覚した紙コップ製造所のケースである。そこでは14~18歳の少年31人が工場に閉じこめられ朝5時から深夜まで働かされ、暴力、栄養失調により歩くこともできない子もいた。新聞報道によれば彼らの給料は月に約600バーツである。それからさらにいくらか引かれていたであろうが、600バーツというのはTDRIの貧困線(Poverty line)をわずかに上回るころであろう。(1988/89年の貧困線は都市部では一人当たり年間世帯総所得が6324バーツである。)つまり、TDRIの基準では彼らは貧困でないということになる。貧困線は必要な栄養摂取量とその他の支出を基準に決められているが、上述のケースは労働の強度を考慮すれば必要な栄養摂取量も高くなり、従って貧困線も高くなり、彼らは貧困層に含まれることになろう。マクロ的な貧困状態を分析する場合に、労働強度まで考慮できないのは今のところやむを得ないことなのかもしれない。今後、改善されるべき点であろう。

ところで、上述の道路建設であるが、会議が終わって1カ月がたつ今でも完成していない。また、会議出席者を歓迎する看板や垂れ幕も多くはそのままである。これまたタイらしいという気がする。
(1991年11月記 京都大学東南アジア研究センター助教授)